

日本医史学会編『医学史事典』刊行記念
令和5年1月例会

第三部 日本の医学(1): 古代から近世まで

—その概略—

真柳 誠

古代から近世までの日本の医学・医療には、大別して中国系の漢方・針灸などとヨーロッパ系の蘭方・蘭学などの2系統がある。ついでには後者の編集は青木歳幸氏にお願いし、前者の編集を小曾戸洋氏と真柳が担当することになった。ただし古代から近世までの歴史は悠久で、医学・医療には文化や社会の現象もふくめ、さまざまな様相と変遷がある。それらを限られた紙面にまんべんなく項目立てするかはかなり悩んだ。また項目を担当可能な業績があり、その執筆を同意いただける人選もしなければならぬ。つまり項目と執筆者の双方を同時にきめる必要があったが、基本的には現役の中堅から人選するという方針になった。まず小曾戸氏から素案をいただき、これに真柳が追加・修訂することにし、幾度かの改訂を経ておおかたが定まったのは2019年の10月だったと記録にある。

項目の配列は前半を時代別とし、その間に特筆すべき人物と医書を項目立てした。すなわち以下の1~16を各位にご執筆いただいた。1吉川澄美「神話の時代」、2小曾戸洋「先史から有史へ」、3小曾戸洋「飛鳥時代」、4小曾戸洋「奈良時代—平城京」、5真柳誠「渡来した中国医書と佚存書」、6小曾戸洋「平安時代」、7小曾戸洋「丹波康頼と『医心方』」、8真柳誠「鎌倉時代」、9真柳誠「梶原性全と『頓医抄』『万安方』」、10小曾戸洋「南北朝~室町時代」、11小曾戸洋「戦国安土桃山時代」、12岩間眞知子「茶と医薬」、13町泉寿郎「曲直瀬道三と『啓迪集』」、14星野卓之「江戸時代の医学(初期)」、15星野卓之「江戸時代の医学(中期)」、16星野卓之「江戸時代の医学(後期)」。

さらに江戸時代の医師と医書の諸面について、以下の17~21の項目でご解説いただいた。17海原亮「江戸時代の医師」、18海原亮「江戸時代の医学教育」、19真柳誠「江戸時代に渡来した中国医書」、20真柳誠「中国医書の和刻と日本化」、21真柳誠「日本の医薬著述・出版と医学の日本化」。

医療の分野別の歴史は以下の22~28の項目を立て、各位にご執筆いただいた。22瀧澤利行「養生思想」、23蔵方宏昌「産婦人科の歴史」、24松木明知「外科の歴史」、25園田真也「眼科の歴史」、26西巻明彦「江戸時代の歯科治療」、27宮川浩也「鍼・灸・按摩の歴史」、28鈴木達彦「売薬の歴史」。

以下の29~33の項目では、諸学術が医学に及ぼした影響や関連を各位にご執筆いただいた。29吉川澄美「国学と医学」、30町泉寿郎「漢学(儒学)と医学」、31福田安典「江戸文学と医学」、32吉村美香「本草学と博物学」、33吉村美香「薬草の調査と栽培」。

江戸時代に普及した医書および流派のトピックについては、以下の34~40の項目でご執筆いただいた。34鈴木達彦「疾病分類と処方集」、35真柳誠「張仲景医書の研究と応用」、36山崎正寿「古方派と吉益東洞」、37渡辺浩二「折衷派と浅田宗伯」、38町泉寿郎「漢蘭折衷の医学」、39小曾戸洋「江戸医学館と考証医学」、40真柳誠「考証医学の古医籍研究」。

医学や医療そのものではないが、関連する事象については以下の41~43の項目で執筆いただいた。41吉田忠「朝鮮通信使と医学交流」、42真柳誠「飢饉と救荒書」、43阿部奈緒美「墮胎・間引き」。

江戸時代には疫病が幾度も流行し、深刻な社会現象を引き起こしていた。その諸面については以下の44~49で各位にご執筆いただいた。44 鈴木則子「梅毒の流行と対応」、45 深瀬泰旦「天然痘の流行とその対策」、46 鈴木則子「麻疹の流行と対応」、47 伊藤恭子「コレラの流行と対応」、48 伊

藤恭子「庶民の疫病対策」、49 野尻佳与子「医師・薬品・病の番付と引き札」。とくに45の深瀬先生は執筆依頼の電話に「学会への最後の奉仕」と述べられたが、今年1月15日に93歳でご逝去されたことを銘記しておきたい。